

『体育科教育』一九五五年六月（体育科教育研究会編／大修館）

体育と運動能力

矢口 新

体育学習と運動技術という題が与えられたが、私は、体育のことは素人であつてよくわからない。何故編集者が素人の私に書けといわれるのか、多分素人の意見でもよいものがあればとつてやるうということであろうと思う。そこで私も盲へびにおじずで、暴言をはくことにする。

体育の目的は、健康な身体をつくることにあることは言うまでもないことであろう。しかし健康な身体、健全な肉体といつても、唯、一般的に、漠然というのではないであろう。私は健康な肉体というのは、広く仕事が出来るということを中心にして考えるべきではないかと思つている。私は運動能力というものを、或は運動技術というものを、極めて広く考えている。いわば、体を使うというように考える。自分の意志に従つて、体を動かすことが出来るようになっていくことである。

幼児が箸を使うことが出来るようになる経過をみると、なかなか複雑な段階があることがわかる。一挙にそうまでもつて行こうとしても急にはいかないので、それまでにはいろいろな基礎的な能力を培養ねばならない。或はまた幼児童が三輪車にのることが出来るように

なる過程をみていても、そうである。足を一定の仕方動かすと同時に、手によって方向をとりながら、眼や耳も働かしつつ、身体をそういう状態に適応させているのである。そういう状態に幼児たちが到達するのには、現在は別に訓練を行っているわけではない。自然にそうなるまで放置されているのである。しかしこれらの行動能力もただ自然の発達にまかされず、要素に分析されて、それらの要素となる能力が、それぞれ合理的に訓練されるならば、もつと早くそういう行動能力をもつに至るであろうと思われる。そういう行動能力が身につくようになることが健全な肉体をもつということであろう。

だから体育というのは、ただ体を動かし、ただ漠然と身体を鍛錬して居ればよいのではないと思う。行動の一つ一つに、はっきりした目標があつてよい筈である。こういう行動をさせるのは、これこれの運動能力を身につけるためである。これこれの行動力を把握するためであるというように、はっきりした目標がなくてはならない。ただ健康な身体という概念を目的として行動させるのではない。これこれのことが立派に出来るということの中に、健康な身体というものが考えられるのである。いわば、具体的に、健康な身体が考えられなければならない。

具体的に健康ということを考えるということは、つまり、健康を行動的に考えるということである。今までの健康という概念には、静的なひびきがあつたのではないか。ただ一般的な状態としての健康であつた。健康は確かに身体の状態にはちがいないが、それを、これこれの行動が出来た状態というように、行動的に考えてみる必要があるのではないか。そこに「仕事」をするための身体的基礎をつくる体育のあり方が考えられてくると思う。

二

私は仕事というものを極めて広く考えているが、仕事をするには、

どうしても何等かの形で体を使うのである。この体の使い方というのが健康という点から具体的に考えられなければならないのである。

かつて私は、靴屋さんの学校で、毎日靴を修理している十六、七の青少年を指導したことがあるが、彼等の身体の恰好は、正直の所、私をおどろかしたものである。肩は前の方にかがみ、腕のひじは内側にまがり、手の指も亦皆わんきよくしているのである。それは毎日かみこんで、靴をたたいているからである。靴を修理する技能という点では、皆一人前なのであるから、そういう意味の身体の使い方は心得ているのである。併し健全な身体をもつという点からみると、こういう身体の使い方は、ゼロである。

併し彼等を一週に僅か一、二時間の訓練をするだけで一年後には殆んど矯正することが出来た。そうして、仕事に対する合理的な身体の使い方ということについても、自覚させることが出来たし、その点から、仕事場の設計についても新しい眼を開かせることが出来たのである。そうしてそういうことが結局、仕事を発展させることにもなるのである。体育というのは、こういうようにして「仕事」へ突込んで行くべきものではないだろうか。

現在は一般に生活ということが強調されている。児童の生活ということもよく言われる。併しそれはただ方法論であってはならない。児童が興味をもつものは何かということやさがすという程度のことであってはならない。むしろ児童の生活そのものを身体的基礎という点から合理化する所に、生活ということや言う中心的意義があるべきではないかと思う。

だから、児童が現在どういう「しごと」をし、どのように身体を使っているかが分析されて、どのように身体を使うのがより健全であるかがはっきりさせられなければならない。これによって、一般的に、唯体操をやらせていたり、スポーツをやらせていたりする体育から抜け出さなくてはならないのではないか。生活の中に、仕事の中に入り

こんだ体育というものが考えられてよいのではないか。

スポーツや体操もそういう体育の中に位置づいて、はじめて、本当に体育としての意義を発揮するのではないか。スポーツや体操は体育の目的のための手段であって、それ自身が目的とは考えられてはならないと思う。少くとも体育の見地からはそうであるべきであろう。やはり体育の目的としての、運動能力育成という目的があつて、それに対してのものであつて、はじめて、体育の中に位置づいているのである。児童は運動それ自身を目的として行動してもよいが、教師にとつては、それははつきり、体育の中に位置づけられている必要がある。

三

私は小中学校時代よく器械体操をやらされた記憶があるが、ただ教師が模範的にやってみせるだけで、どこにどう力を入れて、どう身体を動かしたらよいかということや指導してもらった記憶はない。鉄棒でも、肋木でも、箱とびでも、すべて皆自身で会得する他なかった。どうしても出来ないものは、ただ人のやっているのをながめているだけであつた。こういうのは、運動能力を指導育成するという見地にかけているのである。ただ結果としての技術だけが問題になつているのである。そうして、それが出来るか出来ないかは、偶然の問題になつてしまふのである。実は、そこに指導の問題があるのであつて、出来ない児童を出来るようにしてやる所に体育の問題があるのである。出来ない子供は、身体の使い方がどこに問題があるかを発見して指導してやらなければならない。そこに体育指導の中心がある。

体育においては、ただある技術が所有されていることが重要なのではない。むしろ所有しないものを所有するようにするプロセスに体育の目的があるのである。そこに運動技術の指導訓練が行われねばならぬ理由があるのである。